

國學院大學 人間開発学部 初等教育学科

人間開発学部の目標は、「頑張ることを応援する教育」を実践する教育者・指導者の育成。本学部初等教育学科では、伝統文化、古典文学、体験活動を踏まえながら、教育界が抱える様々な問題に対応できる教育力と指導力を備えた小学校教諭を育成します。



■大学生
津田理沙さん



■先生
成田信子先生



■卒業生
高橋涼太さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

人間開発学部とはどのような学問を展開している学部ですか？

■先生

人間開発学部には教育者を目指す学生がたくさん所属しています。しかし学部名に“教育”という言葉を入れないことには意味があります。この学部では、誰もがもっている可能性を見だし伸ばすということを大事にしています。

それは将来教育者となり子どもたちの可能性を引き出していく力をつけることだけでなく、この学部所属する学生自身の可能性を拓いていくということでもあります。教え、育てるという教育の前に、人間の根本的な可能性に目を向け、その可能性を追求するという理念の学部です。



人間開発学部に属する三つの学科について教えてください。

■先生

私が所属しているのは、初等教育学科です。ここでは児童期の子どもたちに目を向け、彼らの可能性を伸ばしていくことができる人を育てることを主な目的としています。小学校教諭、幼稚園教諭、両方の免許が取得できる学科です。教育実習だけでなく、ボランティア・インターンシップなどを通じてさまざまな環境の子どもたちと接する機会を多く設けているのも、この学科の特徴です。「先生になる」という選択肢以外にも、人と関わり学ぶ経験を通じて、自分の可能性を追求した仕事につく人もいます。

同じキャンパスでは、同学部の健康体育学科と子ども支援学科も一緒に学んでいます。健康体育学科は中学・高校の保健体育の教員免許を取得できるだけでなく、生涯スポーツに関わるさまざまな指導者としての資格が取得できます。子ども支援学科は私たち初等教育学科と隣接した学科です。幼稚園教諭と保育士の資格が取得できます。小学校での教育と幼稚園・保育園での教育の関わりが注目される今、同じキャンパスでこれらの学科が一緒に学び合うことには大変意味のあることだと思います。このように人間開発学部は乳幼児から高校生、さらには生涯にわたる教育まで、総合的に“教育”について学べる学部なのです。

そのため教員のキャラクターも多様です。各教科の教育についてだけでなく、教育にかかわるさまざまな専門性を持った教員が集まっています。人間開発という言葉を軸に、総合百貨店のようにバラエティ豊かな教育と研究が行われている環境です。

初等教育学科は7割以上の学生が小学校の先生として巣立っていきます。その際、小学校の教員免許に加え、副免許として中学校の国語や社会、体育などの資格を取得する人も多く、自分の強みをプラスして卒業できるというのもこの学科の魅力の一つといえるのではないのでしょうか。

初等教育の中で、先生はどんなことを専門として研究しているのですか？

■先生

私は国語教育の研究を専門としています。その中で現在関心を持っている分野は大きく分けて二つ。一つは授業研究として、実際に小学校で行われている授業を見学し、先生や子どもたちの発言を記録するという取り組みを行っています。授業の方向性や教材の使い方などを分析すると同時に、先生や子どもたちにインタビューを実施し、それぞれの視点から授業というものを考えていくというものです。

もう一つが、児童文学と国語教材の関わりについての研究です。こちらでは国語の授業で取り上げられる児童文学作品に触れた子どもたちが、その作品からどんな意味を感じ取り、どのような意見を持つのかについて追究しています。時代とともに作品の受け取り方が変わっていくことが見えてくるんですよ。また最近は幼稚園と小学校、それぞれの教育における連携についても関心を持っています。

高橋さんは大学卒業後、小学校の先生になられたんですね？

■卒業生

一度、教員採用試験で不合格となってしまう、卒業後1年間は都内の小学校で非常勤講師として子どもたちと接してきました。2014年からは正式に教員として小学2年生のクラスを担当しています。先生として仕事をしてきたこの1年間を振り返ると、とにかく必死だったとしか言いようがありません（笑）。小学校の先生の仕事は“子どもたちに勉強を教える”ことだけではないということを学びましたね。

学校全体で行う各種行事遂行のための役割分担、学校運営に関わる業務もあります。1年目なので先輩たちからは「まずはクラスの子どもたちをしっかりと見ることが最重要」と言われ、今年はクラス運営以外の仕事にはあまり関わりませんでしたが、他の先生たちを見て来年から自分が何をすべきかを学びながら過ごしていました。

仕事を始めたばかりの時期、4～5月のころのことは、自分に余裕がなかったためか記憶に残っていません。いろいろなことがありすぎて…。この1年間、“担任”の役割とは何だろう、そのことを考え続けてきたように思います。その答えはまだ見えませんが、四季を通じて子どもたちと接してきて、自分のペースや見通しが持てるようになりました。

津田さんはどんな研究を行っているんですか？

■大学生

私も卒業後は高橋さんのように小学校の先生になりたいという夢を持っています。しかし大学在学中に教員としてのスキルだけでなく、広い視野で教育や社会を見てみたいと考え、3年次に地域社会教育学のゼミを選びました。学校に対して地域がどのように関わっていくことができるのか、そのことが興味の対象です。3年次では研究の手法、フィールドワークの際の記録の取り方やインタビューの仕方など、卒業論文を書くために欠かせない基礎的な技術や知識を学んできました。どんなテーマに絞って研究を進めるかは、まだ少し迷っているところです。



■先生

津田さんは『絵本キャラバン』にも参加していますね。

■大学生

成田先生の主催する『絵本キャラバン』は、幼稚園や小学校へ行って絵本の読み聞かせを行うボランティアなんです。実習や授業以外でも子どもたちと触れあう機会を作りたいと思い、このボランティアに参加しました。

■先生

津田さんは『せんたくかあちゃん』という絵本の読み聞かせが上手いんですよ。面白く読めると子どもたちの反応も良くなりますね。

■大学生

このボランティアのおかげでたくさんの絵本を知ることができました。その魅力を子どもたちに伝える読み方をいろいろ試しているんです。学生同士でもお互いに読み聞かせをしあって、より良い表現方法を模索するというのも楽しいですね。

●大学生活について

國學院大學の初等教育学科を選んだ理由を教えてください。

■卒業生

私は小学6年生のころから先生になりたいと思っていました。6年生になったときに新入生の世話をしたり、勉強を教えたりすることが楽しかったんです。漠然と「小学校の先生になる」という夢を持ち、大学選びも教育が学べることを基準に考えました。高校では野球部の活動に打ち込んでいたため、進路を考える時期が少し遅かったのですが、3年の秋に先生から國學院大學に初等教育学科が開設されると聞き、オープンキャンパスに参加。入学すれば自分たちが一期生となるため、先輩の話聞くことはできませんでしたが、対応してくださった先生方の熱い想いを聞いて、ここで学びたいという考えが強くなりましたね。私自身、国語が得意だったので教育だけでなく国語に関する勉強もしたいと思っていました。國學院大學はカリキュラムに言語や古典の科目もあり、興味があることを追究できそうだったことも決め手でした。また、一期生ということで自分たちがこの学科の雰囲気を作っていけるのではないかと、そんなチャレンジできそうな環境も魅力に感じたんです。

■先生

まさに高橋さんたち一期生が、この初等教育学科の雰囲気を作ってくれました。教員採用試験に対するサポートもまだできていなかったのですが、情報が少ない中でも学生同士が試験対策を研究し、いくつかのグループを作って自主ゼミを主催。学生発信で先生を呼んで、指導をお願いするという環境を作り上げていきましたね。先生たちもその学生の熱意に応えるため、各地の試験問題を分析したり、情報を集めたりとサポートを行いました。このときに出来上がった、学生が自主的に集まって学ぶという雰囲気。これが國學院大學の初等教育学科の雰囲気として今に受け継がれています。少人数教育で学生と先生の距離が近いこともあり、気軽に相談しやすいこともこの雰囲気作りの一助となっているのでしょう。

■卒業生

どうしても小学校の先生になりたいという強い思いがあったので、入試はAO入試を利用しました。試験では先生になりたいという強い思い、そして当時興味のあったいじめ問題について自分の考えを述べました。

■大学生

私が國學院大學を知ったきっかけは、高校3年の担任の先生の奥様の出身校だったからなんです。

小学生のころから先生になりたいと思っていたことを担任の先生に伝えたところ、古くから國學院大學は教員の養成に力を入れていると教えていただきました。初等教育学科ができたのは数年前のことですが、教員養成の伝統がある環境ならしっかり学べるはずだと受験を決めました。体を動かすことも好きだったので、健康体育学科と初等教育学科の両方を受験するため、一般入試を選択。最終的に初等教育学科を選びましたが、この学科でも体育教諭の資格が取得できることも入学動機の一つでした。

印象に残っている授業はありますか？



■卒業生

どの科目も教員という職業に直結することを学ぶことができたと思います。特に印象に残っているのは、学習指導要領に関する授業です。大学の授業で初めて『学習指導要領』の存在を知りました。先生が教科書をもとに授業を行うのは知っていましたが、それ以外の部分は個人の裁量によるものだと思っていたんです。しかし学習指導要領という教員としての

指導方針のベースが、全国的にある程度統一されているんですね。こういったものの存在が、日本の学校運営を支えているんだと思いました。また、大学2年で参加した『教育インターンシップ』という授業も印象に残っています。これは約半年間、小学校の教育現場に参加する授業です。

■先生

教育実習の前に現場を経験してもらいます。インターンシップでは教壇に立つのではなく、学生は先生の補助を担当。さらにその日に経験したことを報告書として作成するという経験もします。大学の教育実践総合センターが学生の目指す進路に合わせて、近隣の学校と連携しながら学生とインターンシップ先の学校とのマッチングを行っているんですよ。

■卒業生

私は小学校で特別支援学級の補助を経験しました。このインターンシップに参加するまでは、小学校などへ行っても子どもたちからは「お兄さん」と思われていたし、自分でもそのつもりで接していました。しかしインターンシップで初めて「先生」として子どもたちと向き合い、「お兄さん」と「先生」の違いをはっきり認識することに。ただ子どもたちと仲良くなるだけでなく、彼らの見本としてしっかりしなくてはいけない、そして叱るべきときにはビシッと線を引いて叱らなくてはいけない、それが「先生」なんだと思いました。教育実習に行く前に「先生」としての接しかたを経験できたと思います。

■大学生

私は『人間開発基礎論』が、学部の理念が反映されていて、とてもこの学部らしい科目だと思いました。この授業では人の考え方だけではなく、人間のからだのしくみまでも学び、人間というものを総合的に知ることができるんです。ある日の授業では自分の歩く姿を連続で写真に撮り、自分が何気なく行っている動作を客観的に見直す経験もしました。自分自身の体のつくりを深く気にしたことなど

なかったこともあり、人体の仕組みや機能、成長を自分自身の体と照らし合わせて考えるきっかけとなりました。

4 年次になると自由に選択できる科目も増えるので、これからはテーマ別の講義も受けていきたいですね。日本語の言葉についての講義や歴史に関する授業に興味があります。

●就職活動、仕事について

大学で学んだことが仕事に生きていると思うことはありますか？

■卒業生

私は 4 年次に成田先生のゼミに所属していました。卒業論文では『因幡の白兎』と『かさこ地蔵』をテーマにした研究を行ったのですが、教員になった今、使用している小学 2 年生の教科書に『因幡の白兎』が取り上げられているんです。子どもたちには自分自身の研究をもとに、教科書には載っていないような話も交えながら作品の魅力を伝えることができたと思います。まさに自分の研究が仕事に直結した瞬間でした。私の授業を見学した他クラスの先生からも好評だったのも嬉しかったですね。授業の進め方や教員としてのスキルを身につけることが大学での学びではなく、在学中のさまざまな経験が教員として面白い授業を実施する種になるんだと思いました。同期では音声学や演劇などをテーマにした研究をしている人もいて、初等教育もいろいろな角度からとらえることができるんだなと刺激を受けましたね。

■先生

卒業論文では、さまざまな分野にチャレンジしている先輩たちがいます。幼稚園と小学校の教育連携について、実際に現場に出向いて見て聞いて記録しながら研究を続けている人も。研究領域はとても広いですよ。高橋さんたち一期生は 12 人のゼミでしたが、そのうち 11 人が小学校の先生になり、一人は学生時代から続けていた演劇の分野へと進みました。興味と研究を関連付けて、将来に繋がる知識や思考力を身につけていったのだと思います。

就職活動はどのように展開していましたか？

■卒業生

私は一般企業への就職は考えず、教職一本。3 年次の 1 月ごろから小学校の教員採用試験のための勉強を開始しました。

■先生

ここでは 1 年次で“ルーム制”という、少人数の学生に対して一人の教員が担当につくというサポート体制を取っています。勉強の仕方はもちろん、プライベートな相談まで親身になって行います。このルーム制で担当だった教員が、3 年次の教育実習の際にも指導教員となるので、学生一人ひとりの

性格に合った指導ができるのが特徴です。学生たちが教員採用試験の勉強を始めるのは、実習を終えてからがほとんど。全国各地、都道府県によって採用試験の内容や傾向、試験時期が異なります。その採用試験に向けて、学生が教員を目指す地域の試験傾向を分析しつつ、勉強のスケジュールを作っていますね。

■卒業生

採用試験の勉強は早めに始めようと、3年次の夏くらいには参考書を買ったのですが、実習が忙しくて手をつけられず…。本格的に試験勉強を開始したのは1月でした。まずは教職教養の分野からスタートしたように思います。



■先生

もちろん教員になる学生ばかりではなく、この学科で学んだことを活かしつつ一般企業への就職を目指す学生もたくさんいます。その業種は本当に多種多様ですね。中でも多いのは幼稚園教諭や塾の講師でしょうか。小学校の教員同様“子どもたちに勉強を教える”という分野ではありますが、その目的や教育の手法は異なります。どんな分野へ旅立って行っても、この学科での勉強を通して学んだ“人間を見る”経験を役立てることはできるはず。人と一緒に何かを実行する、周りにいる人たちに気を配ることをしっかり身につけている学生として、多くの企業から評価されています。

■大学生

私も高橋さんと同じで、小学校の先生になることだけを考えて採用試験に向けて勉強をしています。成田先生には小論文の添削をしていただきました。同じ地域の採用試験を受ける学生同士で自主ゼミも立ち上げたんです。自主ゼミでは過去問題の分析だけでなく、自分たちで市役所へ行ってその地域の教育方針をリサーチしました。夏の試験本番に向けて、仲間みんなで頑張っていきたいです。

● 5年後に向けて

今後の夢や目標を教えてください。

■大学生

まずは小学校の先生になること！そして年齢を重ねても子どもたちと一緒に体を動かして活動できるような先生になりたいです。それには私自身の体力キープも大切ですが、いつも子どもたち一人ひとりをしっかり見て、信頼関係を確かなものにしていくことが欠かせないのではないかと思います。学生である今のうちは、ボランティアとしていろいろな教育現場に行き、それぞれの現場に属する先生や子どもたちの特徴を見て、分析する機会をふやすように心がけています。

■卒業生

クラス担任になってやっと1年。この一年間はクラスのことと自分のことで精一杯でした。5年後には学校を引っ張っていけるような経験と知識を身につけていきたいですね。これからはクラス担任の教員としてだけでなく、主任など肩書きが与えられ、立場も変わっていくと思います。新任で入ってくる先生たちの指導ができるよう、私自身も着実に成長していなくてははいけませんね。

先生という職業は本当に毎日忙しくて大変ですが、自分の頑張りに対する子どもたちからの反応は、本当に素直でダイレクト。そこにやりがいを感じています。例えば既成のワークシートなどを使った授業を行うなど、自分が楽をしようと思えばできてしまう部分もある。でもそのようなツールで授業をしているときの子どもたちは、つまらなさそうな顔をしているし、私自身も教えているという手ごたえがありません。自分がやりたいと思って工夫をしながら授業をしているときの子どもたちの目つきが違うということを目の当たりにし、忙しくても自分らしく一所懸命授業をするということに対する考えを強くしているところです。教員になって1年目、「高橋先生で良かった！」と子どもたちや保護者の方から声をかけていただくことが、こんなにも嬉しく、自分をやる気にさせてくれる言葉だと知りました。これからもそう言っていただける先生であり続けたいです。

■先生

以前から続けている授業研究をさらに深めていきたいと思っています。小学校で実際に行われている授業を参観し、子どもたちの学ぶ様子や先生の教育活動にもっとコミットしていきたいのです。事例研究をしていると、子どもたちが授業に集中し、いい意見が活発に飛び交う場面に出合います。それには何か理由があるはず。事例の中からそんないい授業が行われる環境に対する、一定の知見を見つけていきたいのです。子どもたちと先生の間がいい関係が築かれている授業を、別な教員がそのまま真似をしても同じ効果が得られるわけではありませんが、いい授業が生まれる環境や理由をさまざまな角度から考え、分析し、共有していくことに大きな意味があると思います。この研究で得たものを、初等教育学科の学生へもフィードバックしていきたいですね。

●高校生へのアドバイス

高校生へのアドバイスをお願いします。

■大学生

小学校の先生を目指すにしても、一般企業を希望するにしても、どんな職業にも英語はずっとつきます。受験勉強に限らず、早いうちから英語の基礎力を固めておいたほうがいいですよ。

■先生

小学校でも英語の授業が始まっていますからね。“小学生に教える英語”だけでなく、英会話などを教えにくる外国人のアシスタントティーチャーたちとの意思疎通も必要となりますよ。

■卒業生

小学校高学年になると、週に一度は外国人の先生が来て授業を行うようになります。もちろんアシスタントティーチャーに頼らず、担任が英語を教える機会も増えるので、英語力を磨いておくことは本当に大切です。

■大学生

大学に来て改めて実感していますが、受験対策ではない英語が必要な場面が多いんです。



■卒業生

高校生のうちに勉強をしっかりしておくことはもちろん大切ですが、時間があるうちにいろいろなことにチャレンジしておくこともおすすめしたいです。私は高校時代のアルバイトで、人に対する気遣いを身につけることができたと思っていますし、野球部で練習や試合に打ち込んできたことも今の自分に大きな影響を与えています。さまざまな価値観を知ることは、教員という職業に就くうえでも欠かせない素養です。今思えば高校生のうちにもっとたくさん本を読んでおけばよかった、もっともっといろいろな考え方と出合っておけばよかったと後悔しています。みなさんも経験値を増やすことを意識した生活をしてみてください。

■先生

この学科に入学する学生は、言われたことはきちんと実行する着実な人が多いと感じています。もちろん指示に従うことも大切ですが、自分の頭で考え、自分の意志で何かを選ぶという経験を高校生のうちにたくさんやっておいてほしいですね。情報があふれる現代社会の中では、何かを決める際にたくさんのアドバイスや他人の意見から影響を受けることになります。しかし“誰かが言ったから”という視点ではなく、自分で決めて自分で選ぶ力を鍛えてください。なぜそれを選んだのか、自分の言葉で考え、伝えることも重要です。勉強に関しても同じ。受動的に勉強をするのではなく、興味のあることを自分で掘り下げていくことも楽しいものです。将来教員となり、子どもたちを導く立場になる人間として、自らの意思で行動できる力は欠かせないものです。

最後に改めて、國學院大學や人間開発学部初等教育学科の魅力を教えてください。

■卒業生

私たちの学んできた横浜たまプラーザキャンパスは、人間開発学部の学生だけが集まるキャンパス。そのため学生の数もそれほど多くなく、アットホームで学生も先生もみんな顔見知りなんです。成田先生はまるで母のように何でも相談できるし、事務関係の職員のみなさんもみんな自分のことを知っていてくれる。温かくて安心できる環境で学べてよかったなと思います。

■大学生

高橋さんの仰るように、人と人とのつながりが強いので、いい仲間に出会える環境だと感じています。学科は違っても、先生になりたい、人に何かを教える仕事に就きたいという共通した目標を持つ学生

が多く集まっているからか、みんなが助け合って夢に向かっていていると感じるんです。先生も先輩も同期も後輩も、濃い人間関係が築けています。

■先生

一学部だけが学ぶキャンパスだからということもあるかもしれませんが、確かに仲間意識は強いかもしれません。先日初等教育学科では3度目の卒業生を送り出しましたが、みんなが手を取り合って次のステップへ進んでいこう、仲間同士これからも頑張っていこうという気概を感じました。それぞれ選んだ道は違っても、お互い助け合ってしっかり進んでいこうと励まし合う学生たちが育っています。入学して多くの経験を積み、3年次になるころには学生みんなが頼もしく成長していることを目にしてきました。みんなが前を向いて、自分らしくチャレンジしている、そんなキャンパスですよ。

●インタビューに答えてくれた方々



■先生

成田信子先生

神奈川県立湘南高等学校出身
お茶の水女子大学文教育学部国文学科卒業
お茶の水大学大学院人文科学研究科専攻修了



■卒業生

高橋涼太さん

東京都立文京高等学校出身
國學院大學人間開発学部初等教育学科 2013年3月卒
都内公立小学校勤務



■大学生

津田理沙さん

私立八千代松陰高等学校出身
國學院大學人間開発学部初等教育学科 3年生